

古写真や絵画で見る 仙台歴史散策

七夕の風景

仙台市博物館 学芸員 水野沙織

第8回

七夕の祭りと儀式

七夕は七月七日に行われる星祭り、織姫と彦星が年に一度会うという伝説と技工や芸能の上達を願う乞巧奠の行事が中国から日本に入り、さらに古代日本の棚機津女に関する信仰が結びついて伝わる行事です。笹竹に短冊などの飾りをつける七夕飾りが始まったのは、江戸では元禄年間（一六八八～一七〇四）頃と言われ、この江戸風の七夕飾りが仙台にも伝わったものとされています。また七夕は江戸幕府が定める五節句の一つで、仙台藩でも藩士が登城してお祝いする「七夕御祝」の行事が、ある時まで行われていました。



「参詣記」に見える「七月七夕の祭り」 仙台市博物館蔵 ※9月16日まで仙台市博物館で展示中

江戸時代の七夕の風景

江戸時代の仙台の七夕の風景を描いた資料の一つに、国分町の紙店の手代佐吉の筆による『参詣記』があります。佐吉が仙台城下や近郊の寺社や祭りに出かけたことを和歌や挿絵を添えて記した日記です。文政三年（一八二〇）七月七日、佐吉たち紙店の奉公人は、主人の家族と近所の笹屋の家族たち総勢二十三人で評定橋（青葉区花壇・霊屋下）の「七夕まつり」に行きました。前夜のうちに皆々と翌朝早起きすることを約束し、「言の葉にたがはず（違わず）」（笹の葉の掛詞でしょうか）、早く起きて見物に出かけたのです。挿絵には「七月七夕の祭り 御評定橋人くんじゅ（群集）の図」と記されていて、橋の上やたもとには笹竹を持ち寄った人々の姿が見えます。江戸時代の仙台の七夕では、七月六日の夜に笹飾りを出し、翌朝に評定橋などから広瀬川に流す風習がありました。佐吉たちが見物した「七夕まつり」はこの七夕送りを指しています。

仙台藩士の浜田家の年中行事書（文久二年・一八六二）には、七月六日に五色の紙、式（色）紙、短冊に詩歌を書いて竹に付け、牽牛・織女の星を六

日の夜から翌七日夜まで祭る、と書かれています。このように、仙台の七夕は笹飾りを家々の軒に出し、翌日に川へ流すという祭りだったのです。

旧暦七月六日が七夕まつり？

十三代藩主伊達慶邦が仙台の風俗を記した『やくたい草』には、仙台の七夕が七月七日ではなく六日の晩に祝うことになった理由について、六代重村の代にさわりがあつて仙台藩では七夕節句の祝いをしなくなったとしていいます。これは、宝暦十二年（一七六二）、六代宗村の娘の柳姫が七月七日に死去し、藩士が登城する「七夕御祝」の行事をやめたことを指すのでしょうか。この影響で、城下の七夕飾りも七月六日に祝うようになったと考えられます。

明治六年（一八七三）に太陽暦となつてからも街中の七夕飾りは旧暦の七月六・七日に行われ、明治時代末期に新暦の八月六・七日に開催となり、昭和二十三年（一九四八）には八月六・八日の三日間になりました。豪華な七夕飾りが登場し盛大になるのは大正末から昭和初めにかけて、七夕に「連合大売り出し」を合わせて、町々が出す七夕飾りを競わせるようになってからのことです。



絵はがき「仙台 美しき扮飾を凝したる七夕祭り」昭和初期頃 仙台市博物館蔵

企画展

戦国の伊達氏 一植宗から政宗へ

9月1日(日)まで好評開催中!

戦国時代の東北地方で、最終的に最大の大名となった伊達政宗。そのルーツは鎌倉時代にさかのぼります。本展覧会では、伊達氏の初祖・朝宗から歴史を読み起こし、14世植宗、15世晴宗、16世輝宗、そして17世政宗を中心に、戦国時代に躍動した伊達氏の姿をぜひご覧ください。

【観覧料】常設展料金でご覧いただけます。
一般・大学生460円(360円)、高校生230円(180円)、小・中学生110円(90円)
※30名以上の団体は()内の料金。このほか各種割引があります。
【開館時間】9:00～16:45(入館は16:15まで)
【会期中の休館日】毎週月曜日(8/12は開館)

東北最大の勢力を築く 政宗の姿

(右)重要文化財 黒漆五枚胴具足 伊達政宗所用 仙台市博物館蔵 [通期展示]



織田信長から輝宗への文書

(左)織田信長朱印状 伊達輝宗宛 (天正5年・1577) 閏7月23日 仙台市博物館蔵 [通期展示]



◆仙台七夕まつり-お盆期間(8/6(火)-8/18(日))は毎日開館します◆

仙台市博物館 TEL:022-225-3074 ▶8月の休館日 毎週月曜日(8月12日は開館)

SENDAI CITY MUSEUM 〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) ▶ツイッター @sendai_shihaku ▶博物館HP 仙台市博物館

検索